

「お女中」彼はふたたび、できるだけやさしい声でいった、「どうぞ、まあ、わたしの申すことをお聞きになって！……このあたりは、夜分、若いご婦人のお出でになるようなところではありません！ お泣きなさるな、お願いだから！——どうしたら、お力になれるか、それをお話しくだされ！」ゆるゆると女は立ち上がったが、彼に背をむけたまま、たもとのかげで、むせび泣きつづけている。彼はそっと片手を女の肩のうえに置いて、頼むようにいった、「お女中！——お女中！——お女中！……ほんのちよつとだけ、お聞きなさい！……お女中！——お女中！」すると、その「お女中」は、くるりと向きなおり、たもとを下ろして、片手でつるりと顔をなでた——見ると、顔には目も鼻も口もなかった——悲鳴を上げて、彼は逃げ出した。

紀ノ国坂を、駆けに駆けた。前はまっ暗で、なにも見えなかった。彼はひたすら走りつづけて、ふり返って見る勇氣すらなかった。ようやく、はるか向うに螢の光ほどの、提燈ちんのあかりが見えた。彼はそのほうへ急いだ。近づくとそれは、道ばたに屋台を出している、夜なきそばの提燈にすぎなかった。しかし、そんなことのある後では、どんなあかりでも、どんな人間でもよかった。彼はそば屋の足もとにころがり込むようにして、叫んだ、「ああ！——ああ！——ああ！」

「これ！ これ！」とそば屋は、ぞんざいに怒鳴った。「これは！ いったい、どうしたのだ。だれかに、斬やられたかの？」

「いや——だれにも斬やられやしない」息をはずませながら答えた、「ただ……ああ！——ああ！」

「——ただ、おどかさただけですかい」と、そば屋はそっけなく訊たずねる。「追剥おいはぎにでも？」

「追剥じゃない——追剥じゃない」恐怖のあまりあえぎながら……「いたのだ……女がい

たのだ——濠ばたに。——そして、その女が見せた……ああ！ そいつが、なにを見せたか、とてもいえない！」

「へえ！ 女の見せたものって、こんなものじゃなかったんですかい？」そば屋はそういって、自分の顔をつるりとなでた——と、その顔は、卵のようになった……そして、同時に、あかりもふっと消えた。